

実録の中の木村重成

高橋圭一

一 使 者

落語の「粗忽の使者」が大好きである。子供の頃、故五代目柳家小さん師の口演をテレビで見、笑い転げた記憶がある。最近、小さん師のDVDが発売されたので早速購入した。「ああ、あの咄」とうなずく方も多いと思うが、梗概を記しておこう。江戸文学の研究者で落語通の方が作った本から、引用する。

杉平 榎目正の家来で、物忘れのひどい地武太治部右衛門が、口上を伝えるに赤井御門守の屋敷へ出向く。しかし、やはり口上の内容を忘れてしまう。そこで、家臣の田中三太夫に頼んで、尻をつねってもらう。いつもはこうやって治部右衛門は忘れたことを思い出すのだが、今回ばかりは思い出せない。普段から尻をつね

っているの、尻にたこができて効果がない。そこで家中の力の強い者を所望するが見当たらない。仕方なく、出入りの大工を家臣ということにする。大工は自分の釘抜きを用いて尻をひねったから、さすがに効き、「使者の口上は」と聞く三太夫に、「屋敷を出る折り、聞かずに参った」。

解説に、「数多ある落語の中でも、最も笑いのとれる咄の一つ、爆笑落語と言っているだろう」とある。同感である。「粗忽の使者」は聴き手に下知識の必要がなく、だからこそ誰もが大笑いできる。ただ、この落語元々は、立派であるはずの使者が粗忽者であったというパロディ風の可笑しさが、主眼だったのではないか。

誰もが知る『仮名手本忠臣蔵』（浄瑠璃初演 寛延一年一七四八）、江戸時代には、どの場も周知されていたよう

だが、現代ではそうとも言えない。浄瑠璃を読み返すと、観たことのない場面の多いことに気付く。二段目に、大星力弥と許婚いいなすけの小浪との対面が仕組まれていることを、どれほどの人が御存知だろうか。加古川本蔵、松切りの場の直前である。浄瑠璃を引用する。

さすが大星由良之助が子息と見えしその器量。しづしづと座になほり。……「主人塩谷判官より若狭之助様への御口上。明日は管領直義公へ 未明よりあひ詰め申すはずのところ。さだめてお客人もさうさうにお出であらん。しかれば判官若狭之助兩人は。正七つ時（午前四時）にきつと御前へあひ詰めよと 師直様より御仰せ。万事間違ひのなきやうに いま一応お使者に参れと。主人判官申しつけ候ゆゑ みぎの仕合せ（以上、申し上げました）。このとほり若狭之助様へ御申し上げ下さるべし」と。水を流せる口上に。小浪はうつかり顔見とれ とかう。答こたへもなかりけり（何の返事も出なかった）。

力弥の水際立った使者振りに、小浪は惚れ直した。力弥が来たと聞いた小浪は、「日ごろ恋しゆかしい力弥様」と言っているので、惚れ直したで間違いない。武士らしい武士

と云えば、寡黙なイメージがある。饒舌は確かに好ましくない。が、緊張する場面で言うべきことを過不足なく言えるのは、江戸時代にあつて非常に重視された能力であつた。浅野内匠頭の刃傷松の廊下を遡ること十余年、元禄三年（一六九〇）刊の『人倫訓蒙図彙じんりんこんもうずい』巻一に「使者役」が載っている。

【使者役】は公界くがい（世間）に出す第一の面道具おもてなれば、その器量をえらび、発明にして（賢くて）弁舌あざやかにて、礼式をしり、文字をしりて、片言かたこと（方言や俗語）をいはざるを上とすべし。奏者又同じ。

男前で頭がよくて弁も立つ、力弥は正しくそういう若侍であつた。許婚の小浪が、ぼうつとなつたのも当然である。

講釈師馬場文耕に、『盛岡貢物語もりおかみつぎものがたり』の一作がある。この作については、以前論じたこともある（参考文献「文耕著作小考」）ので詳細は省く。南部盛岡藩の留守居役（外交官）尾崎富右衛門が、主君の盛岡到着を幕府に報告し地元の名産を献上する使者役を勤めた際の、身を挺した忠義ぶりを描いた実録である。文耕が目立ちたがりだったのか、実録には珍しく、彼の作には序の付されたものが多い。以下に『盛岡貢物語』の序を掲げる。

唐土の蘭相如^{りんしやうじよ}、我朝の東且元は使節の冠たる事、能く世の知る所也。四方^{しほう}に使ひして君命を辱しむ事なきを忠といふ。聖人も賞し給ふ処むべなるかな。ここに今年（宝暦七年一七五七）水無月、南部の大使（尾崎富右衛門）は公（幕府）へ使ひしての忠言、奇なるかな、信なるかな、予、是を賞して、彼の英士の伝を挙げて「貢物語」と題して、秃筆^{とくひつ}せしめ畢んぬ（一書を綴った）。

武江 馬文耕

蘭相如は中国戦国時代の趙^{ちやう}の人。和氏^{かし}の璧^{たま}を持って大國秦^{しん}に使者として赴き、見事に使命を果たした。『史記』「廉頗^{れんぱ}蘭相如列伝」が、よく知られている。東且元は勿論、片桐東市正且元。且元は確かに豊臣家の使者であった。「四方に使ひして君命を辱しむ事なきを忠といふ」、これは『論語』子路篇の一節に由来する。原文では「忠」ではなく「士」であるが。以下、吉川幸次郎氏の著書を引く。「子貢問うて曰わく、何如^{いかん}ぞ斯^これ之れを士と謂うべき。子曰わく、己^{おのれ}を行^おうに恥じ有り。四方に使ひして、君命を辱ずかしめず、士と謂うべし。」「士」とは「すぐれた官吏の意であるように、思われる。」太平の世の武士に求められたのは、「すぐれた官吏」としての能力であつたらう。使者役

は戦国の世よりも、江戸時代に入ってから、一層重要になつた役目であつたと私は考えている。大坂城の男たちの中で使者と言へばこの人、本稿で取り上げる木村重成である。

冬の陣の和睦が成立して、徳川家康の誓紙受け取りの使者木村重成は、堂々と家康から血判を貰つて帰つた。ただそれだけのことであるが、史実ではなく真赤な嘘である。重成が向かつたのは秀忠の陣所で、家康の誓紙は常高院・二位局・饗場局^{あえば}の三女が大坂城に持ち帰つた（『大坂冬陣記』他、『大日本史料』第十二編之十七）。しかしながら、大坂の陣の実録で、重成の使者に関して史実どおりに書いたものは目にしていない。早く成立した（後述の『難波戦記』より古い）豊臣秀頼に焦点を当てた大坂の陣の軍記『豊内記^{ほうないき}』や仮名草子に分類される『大坂物語』には、そもそも誓詞取り交わしのくだりがない。小幡景憲の高弟^こ小早川能久^{おやかわよしひさ}の『翁物語』（承応一年一六五二）明暦二年一六五六）では、重成は家康のもとへ向かつてゐる（巻三 西尾市岩瀬文庫蔵本による）。

ある人がこう語つた。大坂冬の陣の時、秀頼公から重成と大野修理治長（重成と共に使者に立つたのは郡主

馬亮良列よしつらであつたが、家康のもとへ使者として赴いた。家康から血判の捺された神文が二人に渡され、大野は畏つて頂こうとするが、重成は受け取らない。「是非、血判を捺すところを見届けた上で、秀頼様に報告したい」と言う。家康の家来たちが抑えようとしたが、重成は承知しないので、家康に伝えたところ、「重成は無礼な奴だ」と怒る。それでもなお、重成は血判の筆元を見たいと言い張るので、家康も仕方なく筆元を見せて血判を捺した。二人が退出した後、家康は重成を「今時、珍しい若者だ」と褒めた。

来てもいない重成を家康が褒めること自体有り得ないが、もう少し後まで読んでみる。

この話を聞いた、ある人物が批判した。「重成が、それほど家康に近付いて筆元を見たのなら、家康を一太刀討たなかつたのは残念なことだ。大野と二人がかりならば討てたろうし、家康さえ亡き者にすれば秀頼公の天下だったろうに。やはり命は惜しいものと見える。」これに対し、小早川能久は重成・大野を弁護する。「重成・大野は命を惜しむ者ではない。……家康は天下無双の名将、どうして敵の両臣を近付けたりし

ようか。愚かな我々でさえ、そのように思いつくのだから、『家康公の御内証の御用心は思ひやるべし』、きつと家康は上座にいて、家臣たちが中座の左右に並び、重成・大野を末座に置き、筆元を見せたのである。たとえ家康を討とうとしても、中座の家来たちに討ち取られてしまふに決まっている。討とうと思つても不可能だったのだ。」

初めて『翁物語』を読んだときの私のように、このくだりでなるほどと思つた人は、兵学者の術中にはまつている。家康が上座に座り、その下に徳川の家臣たちが並んで云々というのは、能久が「思ひや」つた、こうだったはずと想像したことに過ぎない。「講釈師見て来たよふな虚うそをいひ」という川柳は、文耕の弟子の森川馬谷という講釈師が詠んだものだそうだが、兵学者小早川能久も見えてきたような嘘をついている。

寛文年間（一六六一―七三）以前に成つた徳川最良の実録『難波戦記』では、誓紙受け取りは左のように描かれている。やはり、重成は家康のもとへ向かう。家康が褒めた重成の描写が詳しくなつてゐることが読み取れる。

秀頼の使者木村長門守重成・郡主馬亮良列の両人が

茶磨山^{ちやうすやま}の御陣所にやって来る。家康の前に召し出されたので、そば近く寄ろうとしたが、本多上野介正純^{まさなり}・安藤帯刀直次^{なおつぐ}・成瀬隼人正成^{まさなり}……板倉内膳正重昌^{しげまさ}以下が左右に伺候していたため叶わず、重成は座の中央に跪いて秀頼の口上を述べる。その「起居振舞^{たちいふるまい}、頼魂^{つらだま}、眼指^{まなこさし}、天晴器量^{あつぱれきりよう}、骨柄^{こつがら}、天性無双の勇士」であった。家康は判形^{はんぎよう}のため指を刺したが血が出なかったので、「老いて貧血になったか」と言う。重成が、「御血判には及びません」と氣遣うだろうと徳川の武士たちは見守っていたが、重成は人形のように固くなって耳が聞こえない風だった。そういうするうち判形も調い、重成は受け取って退出した。

重成の出番はここまでであるが、このくだりにはまだ後がある。

今度は関東方が大坂城へ行き秀頼の誓紙を受け取る、ということの家康はその役を本多正純に命じる。本多は若輩の重成と自分では釣り合いが取れないと主張し、近習の板倉重昌が替って使者を勤める。板倉は秀頼から誓紙の宛名を問われて、咄嗟の機転で家康とし、帰陣の後、その機転を家康から賞された。

重成は「天性無双の勇士」と賞賛されたが、その後

に登場した板倉重昌によって、すっかり印象を薄められている。徳川鼯鼠^{あそ}・家康礼賛の『難波戦記』の文脈の中では、重成は誓紙取り替わし一条の主役には成りきれていない。この一条の記憶も薄れた翌年五月一日、重成は諸將を連れて天王寺を巡見する秀頼に向かつて、やや唐突にかつての胸中を明かす。「去年家康の陣中に赴いた時、家康の近くに寄ることができたなら、秀頼様の『鬱憤を晴らす』（家康を斃そう）と決意していたが、徳川の近臣たちが家康の左右に伺候していたため、叶わなかった。」「翁物語』に近いというより、『難波戦記』の重成使者の記事は、『翁物語』によったものと考えたい。

豊臣鼯鼠の後続の実録『厭蝕太平楽記』では、使者重成は堂々たる主人公となり、華やかなスターとして描かれる。

重成は軍師真田幸村に、「自分は明日の判元見届けの際、出来るだけ家康の怒りを買うように仕向け、わざと討たれる覚悟でいる。そうなれば和睦の使者を討ったと言い立てて、もう一度籠城することが出来る。再戦すれば、きっと関東勢は敗北する」と語る。幸村は感心し、「（重成を失うのは痛手だが）討たれるように計らわれよ」と、この

計略を認める。

十二月十七日、木村重成・郡主馬亮の兩人は黒小袖の紋付に麻上下、供廻り八十人程の平時の体で城を出る。二人が藤堂の陣まで来ると、「本陣が近いので下馬されよ」と言われる。郡が下りようとした時、重成は高音に、「我々は右大臣（秀頼）の命を受けて名代として来たのだ。どうして下馬などしようか」と言つて通る。井伊の陣でも同様に「下馬」と言われて、重成は「それならば行かなくともよい」と返答する。松平忠直の陣でもやはり「下馬」と言われた時には、重成は怒つて「先程から陣ごとに下馬下馬とは何事か。私は右大臣の名代として来たのだ。どうして下馬などしようか。是非下馬せよと言うのであれば、城内へ引き返す」と高音に呼ばわつて通行した。

本陣で馬を下り、玄関に懸かつて刀を提げたまま通ると、成瀬隼人・安藤帯刀から刀を置いて行くよう注意される。重成は陣中の礼義であると、わざと諸大名の並ぶ中を刀を提げ、武士たちの頭へ小尻（刀の鞘の末端）を当てながら広間までやつて来る。酒井左衛門尉、同雅楽頭が出て来て、「大御所はもうすぐ来られる。恐れ多いので、刀を次の間へ出されよ。」重成「各々は大御所を恐れるだろう

が、私は何とも思わない。昨日まで家康父子の首を見ようと、そればかり思つていたのだ。今日、和睦が調うまでは少しも恐れない。陣中に使いする時は刀を放さないものと心得られよ。」火鉢が運び込まれ、その後家康が登場する。家康は重成に向かつて、彼の父木村常陸介との交情を語りだが、重成は「今日は君命を受けて大切な使いに参つた。私情の話は置いてもらいたい」とさへぎつてしまふ。

列座の面々は勿体ないことをと思い、家康も心中では無礼だと怒つたが、面を和らげて「もつともだ長門守、秀頼はよい家臣を持った」と言い、誓紙を重成に渡す。重成が押し頂き開いて見ると、「起請文前書きの事一、このたび勅命に依つて双方和睦せしむ。秀頼子方たるによつて、詫び代として総堀を埋め候事、云々」と有つた。重成はこれを見て、郡に「いざ立たれよ」と促がし、自らも立つ。「このような神文を請け取つて帰る重成と思われたか」と家康目がけて近寄ろうとし、「どうだ人々、止めてみられよ」と大勢の中へ切り込もうとする。

列座の人々は「すわ（さあ）珍事出来、君へ飛び懸かつたら一ト討ち」と息を詰めて控えていた。重成の凜烈たる

気色を見て家康は大いに驚き、両手を揚げて制し、「さて年を取ると物忘れする。それは下書き、本物はこれ」と改めて差し出す。今度のものには「子方」「詫び代」の文言がなく、重成は「これならば申し分はありません。先の神文はとも持ち帰れないものでしたので、無礼仕りました」と本多正純に渡し、「御血判を」と言上する。家康は小刀の先で指を突くが血が出ず、「年を取って血のめぐりが悪い」と言う。列座の面々は、きっと重成が「勿体ない、血判には及びません」と申し上げるだろうと思っていたが、重成は聞かない体でにらみつけ、いざとなれば家康へ飛びかかるうという様子である。家康は仕方なく口の中の出来物を噛み切り、その血を吐き出して血判し、重成に渡す。受け取った重成は、しばらく誓紙を開いたまま火鉢に寄り懸かっていた。やがて「これは真血」と押し頂き、神文を巻きながら列座の人々に、「血判の時、口中に紅などを含んで吐くことがある。そういう場合は、火にあぶると青みが出る。各々もこういう場合使者に出られたならば、重成の今日の仕方を手本とされよ」と言って、首に掛けた錦の袋から文箱を取り出して神文を納め、はるか末座に下がって暇の挨拶を述べて立った。「魏々蕩々（態度が堂々

としていて立派なさま）として辺りを払い、弁舌滔々として水の広河に流るる如く」であった。重成の英気に吞まれて列座の内に口を開く者はなく、皆恐れ入って舌を巻いた。

重成の見事な使者ぶりは、入念に書き込まれた結果『難波戦記』と比べて格段に際立っており、たった一人で関東勢を圧倒している。

『難波戦記』以後、『厭蝕太平楽記』よりは前に成立したと思しい『元和老花軍記』と『浪速軍記全解』では、家康は重成に直面するなり、重成の父木村常陸介に同情する言葉を発し、重成は涙ぐんだとある。その後の記述を読むと、明らかに『厭蝕太平楽記』は『元和老花軍記』等に基づいている。「孝」、という徳が甚だ尊重された江戸時代であれば、親の事を不意に言われたなら涙ぐむのが自然だろう。『厭蝕太平楽記』はそれを敢えて一ひねりした。なお、重成の父を豊臣秀次の家臣で、秀次の死後攝津茨木城で自刃した木村常陸介重茲（しげこれ）とするのは、管見では『元和老花軍記』『浪速軍記全解』の二作からである。

難波戦記物の実録の最後尾に位置する『本朝盛衰記』は、重成使者のくだり（第三篇卷二・三）は『厭蝕太平楽

『記』のそれをほぼ踏襲するが、後に尾緒を付けている。――重成・郡主馬亮が帰陣した後、家康から二人に刀が贈られてくる。重成の刀は妖刀村正であつた。大野治長が「不吉の刀である」と言ったのに対しては、重成は「徳川家に崇る刀を嫌う理由はない」と反論する。大野が「細身で役に立たない」と嘲ると、「刀は使い手の心次第」と、その刀で物の見事に鉄の燭台を切り落として見せる。重成の武術の見せ場を増やしたわけである。「尾緒」の見本のような話で、かくして『本朝盛衰記』は長大化する。使者からは離れるが、『本朝盛衰記』が増補した重成の武芸者ぶりを見せるくだりを、もう一箇所紹介する。第三篇卷二十五、夏の陣で重成は井伊直孝勢と戦っている。当然の如く重成が優勢で、井伊は苦戦し引き揚げることもしない戦況だったが、その中で重成に声をかけ矢を射掛けてきた者がいた。井伊の家来、木股清左衛門の嫡子千千代（十六歳）であつた。千千代の放つた一の矢を重成は右手で握りとめ、二の矢は左手でつかむ。続く三の矢は何と、口で喰い止める。どこかで聞いたような、と思う方もいるだろう。曲亭馬琴の『椿説弓張月』前篇（文化四年一八〇七刊）卷之一第一回、全編の冒頭に置かれた鎮西八郎為朝の逸話を

そのまま使っている。盗用と言われても仕方のないところであるが、……かくして『本朝盛衰記』は長大化した。

二 堪 忍 袋

木村重成は、物語の進行を司る主人公になることはない。前節、和睦の使者に典型的に見られるように、ある一場面では主役を演じるものの、全体としては脇役の座を占める。彼を語るには、印象的なエピソードを拾い上げ、その変化を追ってゆくことが最も適しているだろう。と、思つて試みたのが、前節である。本節では、『難波戦記』に飛び飛びに現れる重成の言動を拾い出してゆく。

重成が初めて注目されるのは、且元が駿府から帰坂した直後のことである。且元と対立する大野治長や渡辺紉に遠慮して誰も言い出せない中、重成は且元を弁護する。「これは、漢の高祖が家臣陳平の謀を用いて、楚の項羽の良臣范増を退けた計略（『史記』『項羽本紀』に見える）で、『智謀の棟梁』且元を退けて大坂城中を滅亡させよう、と計っているのだ。」この言は当たっており、秀頼もなるほどと思つたのだが、結果は且元退去に終る。この少し後に、且元が大坂城内の武将に「私に罪があると言うのな

ら、私の宅に攻め寄せよ」と言い送った際、宛先の一人は重成であった。重成の弁は且元に伝えられなかったらしい。折角の且元擁護の弁が宙に浮いてしまった感を受けるが、且元と重成との結びつきは、このあたりの記述を元に、後の作者が拵え上げたものか。重成の擁護論を聞いた大野と渡辺は別室で陰口を叩く。「重成は生れ付きの臆病者である。先年同朋（僧体で貴人の身の回りの世話をする者）斎阿弥と口論をして、扇で顔を打たれたときに『お前は法師だ。相手とするには足りない。それに重成の命は、君の為に捧げようと思っている。一旦の怒りに身を滅ぼすのは不忠不義である。大勇士の取らない行動である』、と言つてそのまま済ませた。その後、洗湯で人から不礼を仕掛けられたときも、咎めることなく立ち去った。それも皆利口を以つて（口先でもつて）、臆病を忠節であるかのよう^うに言い繕つた。」重成は「利口」を言つたのではなく、すべて本心からであり、「大勇士」であつたことが証明されれば「堪忍袋」の話となる。

武辺咄集として成立が早く、出版もされた書に『武者物語』（明暦二年一六五六刊）がある。編者の松田秀任は小幡景憲門下の兵学者で、本書の中には、講談「木村重成の

堪忍袋」の原話と言つてよい話が収められている（中巻第35話）。

古き侍の物語に曰く。秀頼公の乳母子木村長門守は、摂州大坂の冬陣七八年まへに、掃地坊主へ剛ざれ（悪ふざけ）を仕かけければ、坊主大きに立腹し、「すはともいはば、もつて参らん（刀を取つて相手になろう）」とおもふけしき見ゆる。有合人々是を見て、「事出来らん」と興をさます（びつくりした）。長門守是をみて、すこしも噪がぬ体にて申すは、「我思ふ子細なくば、汝をば遁すまじき物を」といひすてて奥に入る。みな人是を聞きて、「案に相違したる事かな」と、つぶやく人もあり。又「坊主手柄をいたしたる」といふ人もあり。かやうなるに付きて長門守は、日々に肩をすべ（肩身を狭くし）、坊主は日々におごり出るとなり。然るに大坂冬の陣の比、鴨野の辺、蒲生堤におゐて、佐竹衆の備へかかり、大剛のはたらきを仕る。佐竹衆しづい内膳（洪井内膳が正しいらしい）討ち死にす。後藤又兵衛は、木村がふるまひをみて、舌をまく。その時人々申しけるは、「先年『我おもふ子細なくば』といひし言葉は、誠にこの節をや心がけた

るらん」とて、何れも感じけるとなり。されども木村
いよいよおごらず、肩をすぶる。後藤又兵衛是をつく
づくと見て、「長門守けしきは、今度鳴野にての働き
を、十分に存ぜぬ体なり。あつぱれ重ねて何事もあら
んには、真先かけて十死一生の働きを仕るべき気色な
り」と語られけるが、露たがはず（全くその通り
で）、夏の陣には道明寺口にて、こころがけたる討ち
死にを遂ぐるとなり。（以下は四節で紹介する）

『難波戦記』を読み進めよう。右の『武者物語』には鳴
野での戦いとあるが、正しくは今福の戦いである（鳴野・
今福は共に現大阪市城東区内。当時はこのあたりを流れて
いた大和川の北岸が今福、南岸が鳴野だった）。この場所
を守っていた大坂方の矢野正倫と飯田家貞が、佐竹義宣勢
に打ち取られたと聞いた重成は、急いで駆けつけ佐竹勢と
奮戦する。その様子を櫓から見ていた秀頼は後藤又兵衛基
次に加勢を命じる。基次は馳せ向かって、重成に「貴殿の
軍兵は疲れているだろう。自分は新手であるので交替しよ
う。秀頼公からもそう命じられた」と告げる。重成は憤然
として拒む。「今ここに至って交替はできない。あなたは
『老剛』、自分は若武者、この機会に巡り合えたのは自分の

幸運である。交替しようなどとは大人気ないではない
か。」流石に基次も道理に服して後陣に下る。秀頼が基次
に命じたのは加勢であって、交替ではない。このくだり
は、基次が重成の戦功を奪おうとしたようにも読める。
『難波戦記』以後の実録では、重成と後藤基次が共に闘っ
て手柄を立てた、と語られるようになるが、『難波戦記』
では、重成勢のみで大軍佐竹勢と互角に戦い引き取った、
とされる。次に重成が登場するのは和睦の使者としてであ
るが、一節で既に見た。翌年二月に至り、重成は今福の戦
闘で功績のあつた者たちに対して感状を与える一方、秀頼
が重成に感状を与えようとしたのに対しては「感状は他家
に仕える際に必要なもの、自分は二君に使えない覚悟なの
で」と辞退する。夏の陣の討ち死については四節に譲
る。『難波戦記』の重成の言動は、常に若武者らしく爽や
かである。重成に対してすこぶる好意的であると言つてよ
い。

本節の見出しとした堪忍袋の話は、『厭蝕太平楽記』に
も『本朝盛衰記』にも、何故か採り上げられていない。理
由はよくわからない、というのが本当のところであるが、
こんなことを考えている。『厭蝕太平楽記』の重成は、大

仏開眼供養のために片桐且元と共に上京しており、その停止を命じられて大いに怒って、「親仁めが例の我儘云々」と言う。「親仁」は家康への悪口である。『本朝盛衰記』では、重成のセリフが「家康のくそ親仁、例の我儘」とある。大御所家康に対して「親仁」でも随分失礼だが、上に「くそ」まで塗りつけてしまった。血気に逸る若武者の言として許されはする、だろう。しかし、このような言葉を吐く重成と、坊主の無礼を堪え、一部には臆病者とまで思われた重成とは相容れないものがあるように思う。

『厭蝕太平楽記』『本朝盛衰記』という実録の流れの中では消えたかに見える堪忍袋の逸話であるが、講談の中にはしっかりと残っている（次節参照）。堪忍袋を含む実録も、今後見つかるだろう。上方講談界の巨星、二代目旭堂南陵（明治十年一八七七～昭和四十年一九六五）が大正六年（一九一七）から翌年にかけて『神戸新聞』に連載した『難波戦記』全二百四十席の内、第四百十一席から百五十席までを費やして重成の堪忍袋の逸話が読まれている。この中で坊主には、山添了寛やまぞうりやうかんという名前が与えられる。重成が、彼を取るに足らない蠅に例えたことが城中に広まり、「蠅坊主」というあだ名を付けられて、了寛が一層激

怒する一幕もあったが、やがて重成の「沈勇」（冷静沈着でかつ勇気があること）に感じて彼の家来となる。了寛は重成の馬の口を取り、冬夏の陣で奮戦の末に討ち死にする。

近代の講談にまで話が及んだ。いつそのこと、次節も続けて講談のことから始めよう。

三 美 男 子

昭和初年に一大ブームとなった円本の一つとして、その名を留めている講談社の叢書に『講談全集』（十二巻 昭和三年～四年）があった。もともと、安すぎてかえって書店からは儲けが薄いと敬遠され、余り売れ行きは芳しくなかったらしい。その中から桃川若燕の「木村長門守」（第六巻所収）の冒頭を読んでみる。この桃川若燕は本名中島留五郎の二代目若燕（明治八年一八七五～昭和二十二年一九四七）と思われる。彼の大師匠（師匠の師匠）初代如燕（天保三年一八三二～明治三十一年一八九八）は明治講談界の大立者で、明治天皇の前で二度口演した。その二度目、明治二十五年七月九日には鍋島侯邸で「木村長門守の堪忍袋」を読んだと伝える。この御前口演については疑問

の残る部分もあるが、「木村長門守」が桃川のお家芸であったことは認めてよいだろう。

「梅が香を桜の花に通はせて柳の枝に咲かせてしがな」とは、古往今来（昔から今まで）日本無双の武士の典型、花有り実ある木村長門守重成の事を申すので、強ち後世になつてから褒め立てるのではなく、業に當時大阪冬の陣、茶臼山の家康公本陣へ、御判元見届けの使者として参つた時に、独眼龍伊達政宗が感嘆したといふ位であります。

「梅が香を」の歌は、重成の講談の中でよく朗々と読み上げられる。伊達政宗の作、と言うこともあるのは例の講談の嘘で、実は『後拾遺和歌集』（応徳三年一〇八六成立）卷一の中原致時の古歌である。この歌は『太平記』卷二十一「塩冶判官讒死事」で、塩冶判官高貞の妻（芝居では顔世御前）の器量を称した文句の中で使われている。現在に至るまで『太平記』は講談の代表的な読み物であり、講談師が直接よつたのは『太平記』の方だろう。『太平記』は、塩冶の妻女が絶世の美女であることを、綺麗な桜の花に梅の香りを漂わせて、枝振りの面白い柳に咲かせたようだと表現した。後の講談師は美女の形容句を美男子に転じ

て用いたわけである。因みに、司馬遼太郎氏の大阪の陣を描いた『城塞』でも、重成は淀殿の女官たちに「水際立つた殿御ぶり」（「使者」と評判されている）。

さて私は、上方講談師旭堂南海先生（講談師は落語家のように師匠ではなく、先生と称するのが慣例）のファンである。南海師は平成十八年夏の大坂で、極めてユニークな講談の会を催された。名付けて「文月毎日亭」。南海師と、弟子（共に三代目旭堂南陵先生の弟子）である旭堂南湖師が、七月一杯一日も休まず、連続講談（続き物という）を読んだのである。桂米朝師が「講談の続き読みなんて、大阪では久しぶりのことやろね。私が聴き始めた頃には、大阪の秣場はもう無うなつたからな。」（『朝日新聞』大阪版 平成十八年七月二十五日付夕刊「米朝口まかせ」）と言われたように、六十数年ぶりのことらしい。快挙であった。演目は南海師が「難波戦記」、南湖師が「寛政力士伝」。（「文月毎日亭」は平成十九年にも開かれた。演目は南海師が「浪花侠客伝」、南湖師が「赤穂義士本伝」、旭堂南左衛門先生のお弟子さんの南青師が「太平記」、と三本立てになった）南海師の「難波戦記」―前節で紹介した二代目南陵の『神戸新聞』連載『難波戦記』が

ネタ本であつた―は本当に毎日聴きたかつたが、残念ながら三夜しか行けなかつた。

南海師の得意の読み物の一つに『難波戦記』の抜き読み（二回で読みきりの話）「木村長門守重成」がある。本学まで無理を言つて足を運んでいただき、私の講義の受講生相手に「このネタを是非」と注文して読んで貰つたことがあるほど、私も好きな話である。その冒頭近く。

重成は二十一歳、城内一の好男子で女性たちの憧れの的である。城中の廊下を彼が歩くと、二万の女中たちが走り寄ってくる。彼を一目見るや「キャー、バタバタ」。重成は、港に揚がつた冷凍マグロよろしく失神して倒れている女性たちの体を、乗り越えまたぎこえて登城するのが日課であつた。

男前もここまで誇張すると笑いにつながる。南海師の笑いのセンスが光る話である。

『難波戦記』の重成は、一節で引用した「起居振舞、頬魂眼指、天晴器量骨柄、天性無双の勇士」を二枚目の形容と無理して取ろうと思えば、取れないでもない。が、たとえそう取つたとしても、この一箇所だけでは美形の印象は残らない。美男子であると強調するのは、『難波戦記』以

降の作である。『元和老花軍記』が「美男第一」と記し、『難波軍記全解』は「美目顔うるはしし」と言い、田丸常山の『難波戦記大全』はたびたび「無双の美男」「和国随一の美男」と褒め上げる。では、男前故の逸話はというと、戦争が主題なのだから当然かもしれないが、乏しい。『元和老花軍記』が、美男であつたので女性に変装して大藏卿・正栄尼に随つて駿府に下向した、とある位だろうか。もつとも、駿府に下つた重成はさしたる働きをするわけでもない。『厭蝕太平楽記』が、重成が且元と共に駿府に行つたとするのは『元和老花軍記』あたりによつたかと思うものの、重成は偽名を使うだけで女装はしない。一節の使者のくだりを読んでみても、重成が美男であるとは書いていない。『厭蝕太平楽記』の重成は颯爽たる若武者ぶりは強調されるものの、特に美男とは記されない。『本朝盛衰記』では色白で美男なので、袖や袂に女中たちからの艶書（恋文）が投げ込まれるが、重成はいつもそれを焼き捨ててしまふ、とあるのみ。

南海師の「木村長門守重成」でも、重成は日々大量の艶書をもらう。その中で若く美しい青柳（この名前は『厭蝕太平楽記』に見える）から贈られた歌には心惹かれて返歌

を贈り、やがて二人は夫婦となる。青柳は重成最期の出陣を前に、……この続きは次節で。

四 討ち死に

江戸の人気作家、山東京伝の黄表紙(漫画)『きようげんすえひろの狂言 末広栄』(天明八年一七八八刊)に「古今とやらの御講釈より、木村長門が討ち死にの所でも聞きたい」という文句がある(四丁裏五丁表)。江戸の町で難波戦記物の講釈が読まれていたことの証である。ことさら「討ち死にのところが聞きたい」と言わせた重成の死は、他人とどう違っていたのか。

真田幸村の最期の奮闘振りを語る際、必ずと言っていいほど引かれる『薩藩旧記』(『大日本史料第十二編之十九』所収)に、重成の名前も見出せる。

一真田左衛門、幸村木村長門、重成後藤又兵衛、基次薄田隼人、右四人は五月六日に討ち死に仕られ候、古今稀なる働き
の由に候事

右の引用の少し後で「真田日本一の兵」と称される真田幸村に続いて記されるからには、「古今稀なる働き」であったに違いない。勇猛であつたばかりではない。美しい若武

者重成の死には薫香も漂う。

二節で引用した『武者物語』の続きである。

長門守頸をば伊井掃部頭直孝内(家来)安藤長三郎と云ふ侍十七歳にて討ち取る。家康公、木村が首を実検あるに、かの首の出るやいなや、只今そらだき(空薫、香をたくこと)をすることく、伽羅(名香の代表的なもの)の匂ひことごとしくあたりにみつる。家康公御覧有りて、「その世倅(若者)は、いつのまにさやうには心付きたる(心配りができるようになったのか)」と仰せられて、御はめなされたるといへり。

『難波戦記』では家康が首実検したところ、「木村長門守が首甚だ薫じければ、(家康の言)『若輩なりける木村が斯くの如きの行跡、希代の勇士なるを、不便(かわいそう)なる次第かな』と仰せられけり」とある。『厭蝕太平楽記』では重成が(家来に)命じて、兜に名香を焚き染めさせたとあり、『本朝盛衰記』では重成の母が名香蘭奢待を兜に焚き染めるよう教えたとある。『本朝盛衰記』では、重成に子供が生まれて、父と同じ重成を名乗って秀頼と共に薩摩へ下る。これが重成に関する最も大きな増補だろうが、香を焚き染めて出陣という逸話に的を絞るなら、その香は

『忠臣蔵』大序にも出る東大寺正倉院蔵の名香「蘭奢待」であつた、と解説されている。

「武士道と云ふは、死ぬ事と見付けたり（聞書二）」で知られる『葉隠』は、佐賀の鍋島藩で享保一年（一七一六）頃に作られた書物である。その中にも「木村長門守、長髪に香を留め討ち死に仕られ候。武士は嗜み深く有るべき事也（聞書十一）」の一節がある。重成が討ち死にに際して香を焚き染めていたことは、早く広く伝わったようである。

前節で残しておいた南海師の「木村長門守重成」では、重成の妻青柳は、名香蘭奢待を重成の兜に焚き染めておいて、重成が後顧の憂いなく戦えるよう自らの命を絶つ。二代目南陵の『難波戦記』（妻は青柳）桃川若燕の「木村長門守」（妻は白妙）共に、自害こそするものの妻が兜に名香を焚き染めたとはしていない。妻の仕業としたのが南海師の工夫であるのかどうかは、まだお尋ねしていない。

『雨月物語』（安永五年一七七六年刊）『春雨物語』（文化五年一八〇八から六年成立）という傑作読本の著者として、上田秋成（うへだ あきなり享保十九年一七三四〜文化六年一八〇九）

は今も猶人気がある。秋成の随筆に『たんだいしやうしんろく膽大小心録』（文化五六年成立）があり、その中で重成の討ち死にと蘭奢待を炷きしめた首のことが語られている（第135条）。以下途中までは、秋成の友人、大坂西町奉行所与力で文人の内山栗うちやまりつ斎さいの言である。

「我つかひし女の九十になりて死にたる、その母も八十にこへて（死んだ）といふ、「八十の母が十八の時に、木村につかへて、室しつのまへさらざりし（木村の妻の側近くで仕えていた）」と。打死うちじにの日に杯をあげて、室にたまいて「汝もよくせよ（よく考えて行動せよ）」といひて、馬にまたがり門を出づる。室も門おくりすとて出でて、「待たせたまへ」と、一こゑを云ふ。かへり見たれば、七首あいくちもて咽のどをつらぬきたり。侍女がおどろきて、内にかかへて入る。木村は馬を飛ばせて戦陣に行く。いまだ二十町は行かざるよと思ふに、「君うち死に也」と告げかへる。

（中略。ここからは秋成の言）又世に「戦死の日、兜の中に、蘭奢たいを炷たきしめし」と云ふ。みな口々にたがへり（人によって重成について言うことが違う）。予が誹ひかいの句に、「君くれば木村が長門か首の

かざ」。一座かんじて（感心して）ほむる。我もよくいひしと思へりし也。

重成の死は元和一年（一六一五）、内山栗齋の生年は元文四年（一七三九）頃らしい。その間、百二十年余。重成に十八歳で仕えた女の娘が栗齋に奉公する可能性は限りなく零に近い（適当な数字を、当てはめてみていただきたい）。この記事を嘘であると断ずることを、私は何ら躊躇しない。このような見え透いた嘘をついてまで、重成と自分を結びつけたかったのである。嘘をついた女は勿論、それを（多分）信じた栗齋・秋成にとっても、重成は大坂方の中でもとりわけ慕わしい人物であった。

江戸時代、特に大坂における重成人気の根強さを語る逸話をもう一つ紹介しよう。『享和後珍記』^{きやうわごうちんき}という享和年間（二八〇一〜四）以降の堺市中の出来事を記録した見聞集が、重成の塚の噂を載せている。

一、木村長門守石碑之事

文政十一年（一八二八）子年五月、大坂御城の東、若江村近辺に大坂方の勇士木村長門守の石碑有り、右之塚へ願ひを掛け候へば、何にても一品は成就致し候（何であれ一つは、願いが叶えられる）とその節云ひ

ふらし候に付き、大坂町々は申すに及ばず、堀江・島之内その外茶屋町より多く参詣これ有り、五月上旬は専ら昼夜のわがちなく諸方より参詣致し、あるいは鉦太鼓にてはやし立て、異類異形の出立^{いでたち}にて参詣致し、甚だ騒がしき事に候、これに依て御公儀様より漸く差し留め遊ばされ、番人を付け、忝人も参詣相成り申さず候事

人が死後に神として祭られることは、菅原道真や平将門の例を持ち出すまでもなく、珍しいことではない。『難波戦記大全』には、やはり大坂方の豪傑塙団右衛門の墓が瘡^{おこり}（熱病の一種）を落とすのに験があったと記している。真田幸村と一騎打ちした徳川方の猛将、本多出雲守忠朝などは禁酒の神様となった。それにしても、重成の「何にても一品は成就」という御利益はすさまじい。重成の石碑に、人々は一体何を願ったのだろうか。

幕臣栗原信充^{くりはらのぶみつ}（寛政六年一七九四〜明治三年一八七〇）は武家故実家で、特に刀剣や武具、馬具の考証に優れた成果を残した人である。彼には『武林名譽録』（弘化三年一八四六刊）という武辺咄集の著もあり、何より実録『太閤真蹟記』を元にした版本『真書太閤記』（嘉永二年一八四

九〇慶応一年一八六五以降」の編者として私には馴染みが深い。その彼に『肖像集』という著（写本。成立年未詳）がある。国会図書館に蔵されており、同館蔵『肖像集細目』の本文冒頭には「栗原信充が自ラ知人及ビ欽慕セル古人の肖像ヲ写セルモノニシテ、平常ソノ忌辰ニ当リテ之ニ香華ヲ供セリト云フ……明治三十一年二月日」とある。この『肖像集』に木村重成も収まっている。吉川弘文館版『国史大辞典』『木村長門守』や河出書房版『日本歴史大辞典』『木村重成』の項に掲げられているので、見た方も多いことだろう。戦国から近世初頭の武家に並々ならぬ関心を持っていた栗原信充が、「欽慕」していた人物を描いた肖像、これほど信頼性の高い肖像は中々得られない、はずである。ただ、年齢が書かれていないのは、正確なところはわからなかったのであろう。その画たるや、何というかと、重成が美しくないし、若くもない。月代は当然剃っているが、側面からして髪も薄い。これでは若い女中が「キヤー、バタバタ」とはなるまい。困った。実を言くと、関東方として大坂の陣に従軍した土屋忠兵衛知貞の私記の中に、木村長門守は「一木村弥市右衛門子トモ甥トモ云、知行壹万石、歳三十五、（下略）」と記されているのである。

『肖像集』の重成は三十五と言われると、いかにもそれくらいに見える。大正十四年（一九二五）に河内の郷土史家によって著された『木村長門守重成』の口絵に掲げられた肖像（「若江村河井氏に伝はれるものにして原幅は古損多く筆者不明なり」と言う）が、まるで御所人形のようにふつくらとしてしかも眼光鋭く、いかにも颯爽たる若武者として描かれているのに比べて、『肖像集』のそれは潑刺とした精気を欠いている。栗原先生には申し訳ないが、この肖像画は見なかったことにしよう。

付記

本稿を草するに当り、平成18・19年度大阪大谷大学特別研究費の一部を使用した。

参考文献

- DVD『決定版 五代目柳家小さん 落語名演集』コロムビア
二〇〇六
延廣眞治篇 中込重明・二村文人著『落語の鑑賞201』新書館
二〇〇二
土田衛校注『新潮古典集成70浄瑠璃集』新潮社 一九八五
『相良亨著作集』第三卷「武士の倫理・近世から近代へ」所収
「武士道」ペリかん社 一九九三

朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙（東洋文庫519）』平凡社 一九九〇

高橋圭一『実録研究』所収「文耕著作小考」

『改定史籍集覧』第十六冊別記類 所収「森岡貢物語」（復刻版）

臨川書店 一九八四

吉川幸次郎『中国古典選4 論語（中）』朝日新聞社 一九七八

関根只誠『せきね文庫選集第壹期』所収「只誠埃録」 貳百六

教育出版センター 一九八三

菊池真一・西丸佳子『武者物語・武者物語之抄・新武者物語

本文と索引』和泉書院 一九九四

講談社社史編纂委員会『クロニック講談社の90年』講談社 二〇〇一

〇〇一

綿谷雪編『青蛙選書37』幕末明治実歴譚』所収「桃川如燕の

伝」青蛙房 一九八九復刊

吉沢英明編『講談明治編年史』私家版 一九七九

倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』三省堂 一九九五

『講談全集』第六卷所収「木村長門守」桃川若燕 大日本雄弁

会講談社 一九二九

司馬遼太郎『城塞』（上中下）新潮文庫 一九七六

『山東京伝全集』第一卷所収「狂言末広栄」ぺりかん社 一九

九二

『日本思想大系26 三河物語・葉隠』所収「葉隠」相良亨・佐

藤正英校注 一九七四

中村幸彦校注『日本古典文学大系56 上田秋成集』岩波書店

一九五九

大谷女子大学資料館報告書第26冊『堺廻り農村史料并堺年代

記』（山中浩之編集解題）所収「享和後珍記」 一九九二

『続々群書類従』第四所収「土屋忠兵衛知貞私記」国書刊行会

一九〇七

西山全太郎（清溪）『木村長門守重成』大阪府友松会中河内郡部会編集

部発行 一九三九

（本学日本語日本文学科教授）